彙報

心理學讀書會

五月二十七日午後二時半より實驗場內演習室に於て開催、左の講演があつた。

○想像の心理　朝日直樹君

想像の研究として先づ第一編に想像の本質を論じ、第二編に想像の客觀的考察としての日本童話を論じた。

從來、想像の概念、本質を論じたものを五つに類別する事ができる。其の一は想像を記憶より區別して其の概念を決定するもの。即ち記憶は過去の經驗を其儘再生する事であり、想像は過去の經驗が部分的に其の結合を換へて再生する事であるとするもの。其の二は、想像を悟性より區別して概念としたもの、即ち悟性は觀念的に、論理的に新しい結合を作つて行くのに、想像の働きは具象的だと云ふに在る。其の三は、現實にあらざるものを想像とする說。其の四は Ribot, Lucka, Wundt の如く想像過程其のものを分析して概念を定めんとするもの、其の五は、深田教授の說く處にして、即ち、想像の概念を客觀的の生產物より定め樣とすれば勢ひ他の心的過程との區別が困難になる故、感覺、記憶、想像の區別を意識其ものゝ中に見出そうとするもので、感覺は現在にのみ働き、記憶の意識內容は過去に關係して居り、想像は現在、過去何れにも關係する、換言すれば、時間を超越して居ると言ふに在る。そこで結論として以上大體の說を考察するに、其の何れも想像の概念として適當であるが、其れ丈け又、何れにも非難すべき點がある。私は想像の概念に感情の高調と言ふ事を加へたいのである。心的作用の中、想像に最近きものは記憶と悟性とである。其の記憶に感情の高調が加はれば自然、結合の工合に變化を來たす。それが想像であり、悟性の如く論理的のものには、感情の高調が入り得ない。感情の高調が加はる所では自然具象的になる。それが想像である。

第二編、日本童話の研究はヴントの民族心理に從つて童話、說話、傳記、神話の概念を明かにし、日本童話を集めて分類したものである。

教育學會例會

五月二十三日午後六時より學生集會所に於て開會、左の講演があつた。

○臺灣教育所見　文學博士　小西重直君

○勅規に現はれたる僧堂の教育　柳原愛祐君

新著紹介

獨逸思想と其背景　文學博士　朝永三十郎著

本書は凡て五つの論文から成立つてゐる。即ち第一篇『神秘說と獨逸思想』、第二篇『「理性」の哲學、「人文」の哲學としての獨逸哲學、附、獨逸に於ける「人文國家」の思想』、第三篇『獨逸思想と軍國主義』第四篇『獨逸の現代哲學と其最近背景』、第五篇『思想上

の國産奬勵論に就て』この五つである。第一篇は、主として、中世末期から文藝復興期へ懸けて、教會の衰頽及び學問上の變化の爲に久く中世思想の本流として榮えてゐた、スコラ哲學の衰微と共に次第に盛大の域に趨いた非正統的(自由主義的)神秘說が其代表者たるマイステル・エックハールト、ヤコブ・ボエーメ、その他の大陸哲學者を經てカントに及び玆に學的に精練されて獨逸哲學に最固有なる『理性の哲學』として現れるに至る變遷の考察である。次に第二篇は、第一篇に既に其頭首を現してゐる理性の哲學がライブニッを經、カントに至つて大成せられ、更に夫れ以後のフイヒテ、シエリンゲ、ヘエゲル、シュライエルマッヘル等によつて形而上學化されて行く徑路の論述である。第三篇は第二篇に於て既にその一斑を說かれればならなかつた、理性哲學の最直接な最重要な結果として、此哲學の共通特徵を其背景に持つ人文擁護を目的とする國家の思想、所謂『人文國家』の思想が、ナポレオン戰役をその直接の背景として勃興した愛國詩人の感情的國家主義、及びフイヒテの國家論を經て、ヘエゲルの超個人主義的國家論に於て明確なる哲學的基礎に立つに至り、更に彼れの後に於て、思想上並に政事上の理由の爲めに、唯物論的現實主義的國家主義の跳梁と變じ行く事情を說いてゐる。次に第四篇では、ナポレオン戰役、自然科學の優勢その他思想界の事情の爲めに、一旦勢力を失つた觀念論的、理想主義的哲學が、新カント派の勃興、スピノーザ派の復興、其他の獨立體系として復興し來る原因、結果を精論する。最後の一編は、二つの論點に分たれて、其前半は、獨創の研究、思索が決して、外國思想の研究、推奬、紹介と矛盾するもので無く、却て之れを豫想するものなると、思想上の鎖國は即ち思想上の自殺なることを、ギリシヤ以來の思想史が示す明確なる事實と共に手を携へて論證し、後半に於ては、之と最密接な關聯に於て、獨逸人文の愛好者が尊重する獨逸思想を、現代獨逸(しかも一部の思想家には慨嘆されてゐる)軍國主義を以て律し去る態度の輕卒なる事を戒める。第三篇の序文としても、此一卷の緒言としても見られ得る一篇である。之れに對して前の四篇は、其外形の獨立には拘らず、凡て項背相踵いで、察接なる有機的結一に於て『理性の哲學』を中心とする獨逸哲學史の大觀である。各篇の範圍に即してはその全體を諸所の立場から眺めたと見、又各篇の中心思想、特に其前景に立現れる思想家より見れば、各論共に其各時期の主腦を抉揚したと見るべき、獨逸哲學史の核心である。更に又特に、第三第五の二篇を自餘の三篇に對立して見れば(吾々の見樣が、著者には迷惑な、恣なる憶側に終らない限り)そこに取扱はれた哲學史上の事實を通し、夫れを取扱ふ態度を通じ、恰も、靜冷なさうして嚴密な學的考察に本く高き理想主義の臺座に立つて、此現實の人生に對する生ける批判の力たらんとする學的理想と、その實現を伺ふかの樣に思はれる。

此著者の如き著者の、此著書の如き著書に對して、讃美の言葉を附加へるにふさはしき程の名譽さへ持つとは思ひ得ない吾々は唯だ此一卷に於て吾々自らの看取する學的態度、人生そのものに對する態度に於て、史論の體才に於て、行論の形式に於て、要するに凡てに於て學ぶべきものを見出す事と、此書を繙く人々の多くが必ず吾々と同じ感じを促されるであらうと信ずる旨を安んじ

て語り得るのみである。東京、寶文館發行。定價金七十五錢。（植田壽藏）

論理學（哲學叢書、第四編）　文學士　速水　滉著

思考作用を其の要素に分析し其の原理又は法則を研究する原理論（要素論）を第一篇とし、次に思考の原理、法則を根據として其の實際の應用を論ずる方法論を第二篇に据え、後者を更らに、學術研究の方法を論ずる研究法論と、研究の結果を整理統一して組識的のものと爲す方法を論ずる、統整法論との二部門に區分し、第一、第二兩篇とも其の中に更らに數章數節が設けられて居り、此の外、緒論として『論理學の性質及び其の略史』が有り、附錄として演習問題が添加されて居る。

的確な論理學の素養もない、そして又精讀の暇も得なかつた自分にすら、やゝもすれば、倦怠の情を起し勝ちな斯學をかくまで平易に且つ、面白く讀ませる著者の學殖と老練とを充分に伺ひ得た樣に思ふ。殊に例證の多い事や、演習問題のついておる事などは如何にも適當な思ひ付きだと考へる。『從來の所謂、形式的論理學が餘りに、形式に拘泥して思考の眞相を忘れ、乾燥無味に流れて實用に迂遠な弊を脫し、一面に於て、哲學研究の學徒にとりて其の準備的階梯となり、一他面に於て一般の學問研究者が論理的思索の鍛練を爲すの需用に應ぜんことを志した』と言ふ著者の目的は遺憾なく遂げられたと言へよう。

『論理學は形式的科學であると言ふ故を以て、其の價値の乏しい事を力說するものもあるが是は謬見である、論者の言ふが如くなれば、哲學的思索の如きも、解釋によつては形式的性質を脫し得ないものであるから、無價値のものとなるべきである。著者は、寧ろ形式的であるが故に、一切の學問研究者は其の研究を始むる前に、先づ論理學によつて其の頭腦を鍛練する必要があることを主張する』との著者の主張にも共鳴を感ずる自分は、此の好著が廣い範圍に渡つて多くの讀者を得ん事を望むものである。東京、岩波書店刊行。定價壹圓式拾錢。（深田武）

國際經濟論　服部文四郎著

本書、章を分つこと二十四、前十七章に於て一般理論の敍述を試み、後七章に於て各列强の國際經濟の現狀及び政策を說いてゐる。國際間の經濟關係の密接と頻繁と今日の如くなるに拘はらず、我國に於てなほ未だ一編も此方面（此書の取扱つて居る樣な方面）に關する纏つた研究の公にせられなかつたのは學界の不備であり實際界の不便であつたに相違ない。其缺點を補はむが爲に現はれたる本書が、よし其取扱つたる事項の一部分に限られて居るとは云へ、意義の大なるもののある事は明白である。殊に約七百頁の大編、從ひて叙述は、よし冗漫な嫌はあるにしても、詳細にして懇切である。其上に其行論決して單に乾燥なる空理の上に立たず、常に生きたる實際を捕へ、事實それ自らをして理論を敍べしめたる點は、最も吾人に快い所である、讀者の理解を容易ならしむると共に其確信を强制する力が潜むでゐる。問題の性質にもよるとは云ふものゝ、著者の學殖と實際的智識の豐富とに依らずしては遂げ得難かつた事であらうと思ふ。